昭和44年8月2日第三種郵便物認可 平成16年1月1日発行（毎月1回1日発行）第36巻第1号

ユリイカ

Eureka
Poetry and Criticism
詩と批評 1

はじめに魔法の森ありき 石井桃子
退屈とくだらなさの擁護 金井久美子 金井美恵子 丹生谷貴志
高山宏 安達まみ 早川敦子 小田島則子 横田順子 清水知子
阿部日奈子 田中宏輔 近代ナリコ 遠山純生 石岡良治 栗原裕一郎
矢部史郎＋山の手緑 フレデリック・クルーズ セーラ・E・シェイ他
クマのプーさん書誌 横田順子 クマのプーさん年表 本間裕子
連載＊中村稔 竹西寛子 柏倉康夫 宮沢章夫

特集＊クマのプーさん ビター・スウィート

特集＊クマのプーさん

百エーカーの森の病理

A・A・ミルン作品にみる発達障害

セーラ・E・シェイ、ケヴィン・ゴードン、アン・ホーキンズ、ジャネット・コーチャック、ドナ・スミス
訳・解説＝手塚俊文

百エーカーの森のどこかで少年とクマが遊んでいる。表面的には純粋無垢な世界であるが、我々専門家グループが詳細に観察すると、この森には発達上の問題や心理社会的な問題が気づかれず未治療で放置されている。

表面的には純粋無垢な世界である――クリストファー・ロビンは忠実な動物の友達に囲まれて美しい森に住んでいる。何世代もの読者がA・A・ミルンの「クマのプーさん」の話を優しくあたたかい物語として楽しんできた。しかし、時とともにとらえ方は変わり、現代の発達障害の専門家である我々のグループから見ると、これはDSM―Ⅳの診断基準（1）を満たす重大な問題を持つ動物たちの物語である。我々はA・A・ミルンの作品『『クマのプーさん』と『プー横丁にたった家』』を徹底的に読み、百エーカーの森の住人たちの診断を行ったのでそれを紹介する。医療関係者にこの物語には暗い裏側もあることを理解してもらえたら幸いである。

まずプーから始めよう。このかわいそうなクマは二つの問題を合併している。もっとも目立つのは注意欠陥多動性障害（ADHD）（2）の不注意優勢型である。また、例えばプーが雨雲に変装してハチミツをとろうとするなどというバカな考えを起こしたりすることから、我々はプーに衝動性の問題もあるのではないかと議論した。しかしながら、我々は、この行為はむしろ彼に合併する認知障害によるものであり、ハチミツに対する強迫的執着がそれをますます悪化させていると判断した。ハチミツに対する執着は、当然ながら彼の肥満の原因にもなっている。プーの食べ物に対するこだわりと何度も数を数える行為は強迫性障害（OCD）（3）を疑わせる。ADHDとOCDを合併していることから、プーは将来トゥレット症候群（4）を発症するかもしれない。また、

プーは脳味噌がほとんどないと描かれている。しかし、クマの頭の周囲の長さの標準値がわからないのでプーが小頭症(5)なのかどうか診断することはできない。プーの脳の発育が悪いのは物語の中に書かれていることが原因かもしれない。物語の最初で、プーはバタン・バタン、バタン・バタンと後頭部を何度も階段にぶつけながら[クリストファー・ロビンに]ひきずられて二階からおりてくる。彼のその後の認知障害はクマにおける一種の揺さぶられっこ症候群(6)によるものなのだろうか?

プーには治療が必要である。我々は薬物療法が有効だと考える。プーに少量の中枢神経刺激薬(7)を飲ませてみたら彼の日常生活がどんなに改善するだろうと考えずにはいられない。メチルフェニデート[商品名リタリン](8)の服用を含む適切なサポートによって、プーは適応性が高くなり、多くの仕事がこなせるようになるであろう。そしてたぶん、もっと多くの詩を作って覚えていられるようになるかもしれない。

僕は薬をちょっとだけ飲む
薬は僕をちょっとだけ良くする
薬は僕をちょっとだけ良くする
悪くはないね

ピグレットはどうだろうか? 不安で、顔を赤くし、狼狽する、かわいそうなピグレット。彼は明らかに全般性不安障害(9)である。もし彼が子供の時にきちんと診察と診断をうけたなら、パロキセチン[商品名パキシル](10)のような抗パニック薬を処方され、「ゾゾ」をつかまえようとして失敗した時のような心理的トラウマに悩まされることはなかったかもしれない。

プーとピグレットは、彼らの隣人イーヨーの慢性的な気分変調症(11)により、二次的な自己評価の低下を生じる危険性もある。このロバはなんとかわいそうな毎日を送っているのだろう。イーヨーの気分変調症が遺伝性・内因性のうつ病に由来しているのか、あるいは以前の心理的トラウマが彼の慢性的な否定的考え方、元気のなさ、失感情症の原因になっているのかの十分な情報は得られていない。イーヨーには抗うつ薬と個人精神療法が大いに効果があるであろう。少量のフルオキセチン[商品名プロザック](12)の使用でイーヨーはシッポを失った事件のトラウマから解放されるかもしれない。もし彼が食べるアザミに混じって、セント・ジョーンズ・ワート(13)がちょっとだけ生えていたら、森にはイーヨーの元気な笑い声がひびきわたっていたかもしれない。

かわいそうなオウルについて我々発達障害グループの意見は一致した。彼は非常に頭がいいが、読字障害(ディスレキシア)(14)を持っている。彼が言葉の能力の欠点を克服しようとする痛々しい努力は、我々が毎日目にする読字障害で悩んでいる人々のそれと同じである。彼の障害がもっと早く気づかれて、徹底的なサポー

トが受けられていればよかったのに！

我々はルー坊のことを特に心配している。我々が心配しているのは彼の衝動性や多動ではない。というのは、これらの症状は彼の年齢相応であると思われるからである。我々はルーが育っている環境を心配している。ルーは片親の家庭で育っており、これは

E・H・シェパード画。
『クマのプーさん　プー横丁にたった家』岩波書店、1993年より。

彼の将来に問題が生じるリスクを高めている。我々はルーが将来不良少年になって夜中に森の中をうろつき、ウイスキーの割れたボトルとアザミの煙草の吸い殻をあたりにまき散らすのではないかと予想している。我々はもう一つの問題からも、それがルーの将来の姿として十分にありうることだと考えている。ルーの親友はティガーだが、彼はルーにとって良いモデルではない。つきあう仲間は将来に大きく影響する。

ティガーは社交的で親しみやすいが、危険な行動を何度も繰り返す。彼の衝動性の例としては、初めて百エーカーの森に来た時、今まで食べてみたこともない物を食べてしまったことがあげられる。ちょっとした勧めにのり、［今まで食べたこともない］ハチミツやドングリ、はてはアザミまで食べてしまった。ティガーは自分の実験が後でどんな結果をもたらすのかをまったく考えていない。後に彼は高い木に登って下りられなくなり、他の人の迷惑になるとしかいいようがない行動をとっている。この時ティガーはルーを危険のまきぞえにしている。我々のグループはティガーにはどんな薬がもっとも効果があるかを議論した。何人かは彼の問題行動は明らかに多動と衝動性によりもたらされており、中枢神経刺激薬が必要であると主張する。また、何人かはクロニジン［商品名カタプレス］(15)単独、あるいはクロニジンと中枢神経刺激薬の併用が有効なのではないかという。残念ながら、これらの薬物の効果はヒトでしか試されたことがないので、トラにも有効である

かどうかを科学的に判断することはできない。

たとえ我々がティガーを治療できたとしても、片親のもとで育っているルーの将来には問題が残ると思う。カンガはちょっと過保護すぎる。カンガのルーに対する独占欲は彼らが［百エーカーの森という］新しい世界に突然飛び込んできたことと関係しているのだろうか？　カンガの将来はどうなるのだろうか？　彼女は何匹かのオスのカンガルーと一時的な関係を持ち、その結果妊娠して生まれた子供達の世話をするのに疲れ、財政的困難に直面して、年老いていく可能性が高いと考える。しかし、たぶん我々は悲観的すぎるだろう。カンガは立ち直る力のある数少ないシングル・マザーの一人かもしれない。ひょっとしたらカンガは大学入学資格検定試験に合格して大学を卒業し、さらにはＭＢＡ［経営学修士］を取得するかもしれない。そして、カンガはいつの日か百エーカーの森を買い取り、一軒五〇万ドルもする高級住宅地に変えてしまうかもしれない。しかし、教育を評価せず、女性の強いリーダーシップを認めない［百エーカーの森の］社会の中ではそのようなことは実現しそうにない。

百エーカーの森では、小さな一人の少年、クリストファー・ロビンが強いリーダーシップを持っている。我々は今のところクリストファー・ロビンには診断しうる問題を認めないが、いくつかの点について心配している。この子が動物と話をすることに時間を費やしていることは言うに及ばず、両親の監督の完全な欠如には明白な問題がある。我々は物語の中で学業困難の初期のサインを見いだしている。また、Ｅ・Ｈ・シェパードの挿絵を見ると、この少年は将来、性同一性障害〔16〕に陥る可能性があると思う。我々のグループの中の精神分析に重点をおくメンバーの一人は、彼がクマのぬいぐるみにウィニー・ザ・プーという風変わりな名前をつけたのには何らかのフロイト的意味づけがあるかもしれないと言う。

最後にラビットにうつろう。彼は非常に尊大にふるまう傾向があり、非常にたくさんの親せき（しかも多くは別の種類の動物たち）や友人がいると妙に信じ込んでしまうところがある。ラビットはしばしば他の者の意志を無視して彼らを新しいグループに組織し、彼自身はその頂点に君臨しようとする。我々は彼には明らかに病院の上級管理職の適性があると思うのだが、彼はその天職につく機会をのがしている。

森のどこかで少年と熊が遊んでいる。残念ながらこの森は実際には魅力的な場所ではなく、発達上の問題や心理社会学的な問題が診断されず未治療のまま放置されているがっかりするような場所である。彼らが「てんけん隊」を組織して小児発達クリニックに「てんけん」に来なかったのは残念である。

訳注

（1）　アメリカ精神医学会が発行している「精神障害の診断と統計マニュアル」による精神障害の診断基準。

（2）　多動性、衝動性、注意の持続困難などを特徴とする発達障害。人口の三―五％程度と出現頻度は高い。注意が持続困難でボーッとしていたりするのを主症状とする不注意優勢型（ブーさんタイプ）、多動と衝動性を主症状とする多動・衝動性優位型（ティガー・タイプ）、不注意と多動・衝動性の両方をあわせ持つ混合型がある。しばしばがまんすることが困難であるため、親のしつけ不足によるわがままな子と誤解されることがある。日本では司馬理英子氏の著書によって「のび太・ジャイアン症候群」としても知られている。

（3）　不合理だとわかっていても手を繰り返し洗ったり、数を繰り返し数えなおしたりしないと気がすまないなど、ある行為やある儀式を繰り返して行う強迫行為を特徴とする障害。

（4）　チック症の中でも重症のものであり、自分の意志とは無関係に、突然繰り返して起こる体の運動（運動チック）とノドや鼻を鳴らしたり、声を出す事（音声チック）とを主症状とする神経疾患。しばしばＡＤＨＤや強迫性障害を併発する。

（5）　脳の発育が何らかの原因で障害され、頭蓋骨も大きくなれない状態。

（6）　強く揺さぶられた乳幼児の脳に障害が生じて後遺症として麻痺や知能・学習障害および視力障害などが起こる。最悪の場合には死亡することもある。

（7）　中枢神経を刺激して覚醒や注意力を高める薬物。正常の人がカフェインによって集中力が高まったり目を覚ましたりするのと似ている。しかし、ＡＤＨＤに対してカフェインの有効性は認められていない。

（8）　ＡＤＨＤの治療にもっともよく使われる中枢神経刺激薬の一種。ドーパミンやノルエピネフリンなどの脳内化学物質の分泌を促して脳の機能を調整すると考えられている。

（9）　特定の状況に限定されない理由の定まらない不安や心配が長期間続き、このような不安や心配により心身の調子が悪くなり日常生活に支障をきたす状態。不安神経症とほぼ同義。

（10）　選択的セロトニン再取り込み阻害剤（ＳＳＲＩ）と呼ばれる新しい抗うつ薬の一種。うつ病だけでなく、パニック障害や不安障害に対しても有効性が確認されている。

（11）　軽度の抑うつ気分、広範な興味の消失や何事も楽しめないという感じが、長い期間（二年以上）続く状態。疲労感が持続したり、「自分は価値がない」、「いつもみじめに感じている」、「ずうっと、ゆううつだ」という自己嫌悪感や罪悪感を伴うことがよくある。

（12）　選択的セロトニン再取り込み阻害剤（ＳＳＲＩ）と呼ばれる抗うつ薬の一種。アメリカ・カナダではもっとも多く使われているＳＳＲＩのひとつである。

（13）　和名は西洋オトギリソウ。主にヨーロッパから中央アジアにかけて分布している多年生植物であり、しばしば抗うつ作用のあるハーブやサプリメントとして用いられる。

（14）　頭がよく複雑な概念も理解できるにもかかわらず、文字を読むことが極端に苦手な状態。学習障害の一種。

（15）　高血圧治療薬としてよく用いられる薬であるが、ＡＤＨＤの多動性・衝動性優位型やトゥレット症候群の治療に用いられることもある。

（16）　男性の場合、「男性」としての肉体をもって生まれながらも、成長過程において肉体とは逆の性「女性」としての感覚を持ち、女性ではない自分の肉体に抵抗を持ったり嫌悪感を覚える状態。女性の場合はこの逆となる。

解説

従来、発達障害というと、自閉症と知的障害が主なものとして知られていた。しかし、最近、軽度発達障害と呼ばれる子ども達が、実は数多くいることがわかってきた。その数は子ども人口の約一割近くにのぼるとも言われる。軽度発達障害には、高機能自閉症、注意欠陥多動性障害（ＡＤＨＤ）、学習障害（ＬＤ）などが含まれ、知的な遅れはないものの保育園や学校生活への適応上様々な問題をかかえることが多い。基本的に脳の機能的な問題が原因で生じているものだが、教育現場では、本人が「努力不足だ」、あるいは「ふざけている」と言われたり、「親のしつけがなっていない」など、子ども本人や家族が責められることも多い。

エジソンやアインシュタインなども、幼少期の様子から軽度発達障害があったのではないかと言われている。すなわち、すべての子どもたちはいろいろな可能性と個性を持って生まれてくるのであり、発達障害というのも、そうした生まれながらの可能性や個性のあり方のひとつだとも考えられる。

この記事では、カナダのハリファックスにある小児発達クリニックのシェイらのグループが『クマのプーさん』の動物たちを発達障害専門医たちの視点から診断しようとしている。『カナダ医学会雑誌』は、日本における『日本医師会雑誌』のように、カナダの医療関係者の間ではもっとも広く読まれている雑誌の一つと思われる。毎年一二月号ではホリデイ・シーズン特集を組み、純粋に科学的な論文だけでなく、この記事のように半分ジョークのような論文の投稿もうけつけている。

興味深いことに、同じ二〇〇〇年には、イギリスのジョン・Ｔ・ウィリアムズが *Poob and the Psychologists*（邦訳『クマのプーさん　心のなぞなぞ』、河出書房新社）を著している。この著書の中ではプーはスーパー・サイコロジストとして、小心で臆病者のピグレットの成長を助け、イーヨーのうつ病の治癒を助けている。

ウィリアムズの著作とシェイらのこの記事がお互いに影響をうけているのかどうかは訳者にはわからない。おそらく、科学の発見などにおいてまったく別々のグループが同じ時期に同じ発見をするシンクロニシティ（同時性）と呼ばれる状況なのではないかと思われる。すなわち、心理学と発達精神医学の発達により、『クマのプーさん』の中に心理学的あるいは発達障害の物語が隠されていることを、ウィリアムズとシェイらのグループがそれぞれ独立して発見するための条件がちょうど出そろったのだと考えられる。言い換えれば、一九二〇年代にＡ・Ａ・ミルンが『クマのプーさん』の中にそっと隠しておいた問題に、やっと現代の心理学と発達精神医学が追いついたのかもしれない。

訳者の感想として、この記事でのカンガとルーの将来についての記述が、カナダの国情を反映してなのか、かなり両極端に思える。日本では、一般的に考えて、片親のもとで育ったからといってルーがすぐに不良になるとも思えないし、カンガが何人かのオスと一時的な関係を持って何人もの子供を持つという可能性も低いと思われる。逆に、ベビー・シッターなどの社会サービスが発達していない日本では、カンガがＭＢＡを取得して不動産ビジネスを展開するというのも難しいであろう。つけ加えておくとウィリアムズの『クマのプーさん　心のなぞなぞ』の中では、カンガはルーの育児に関してバランスのとれた母親と評価されている。

（てつか　としふみ・尾張西クリニック院長）

Sarah E. Shea, Kevin Gordon, Ann Hawkins, Janet Kawchuk, Donna Smith, "Pathology in the Hundred Acre Wood: a neurodevelopmental perspective on A.A. Milne," in *Canadian Medical Association Journal*, December 12, 2000, Vol.163, No.12, pp.1557-1559.
©2000 Canadian Medical Association